

編會及普道歌

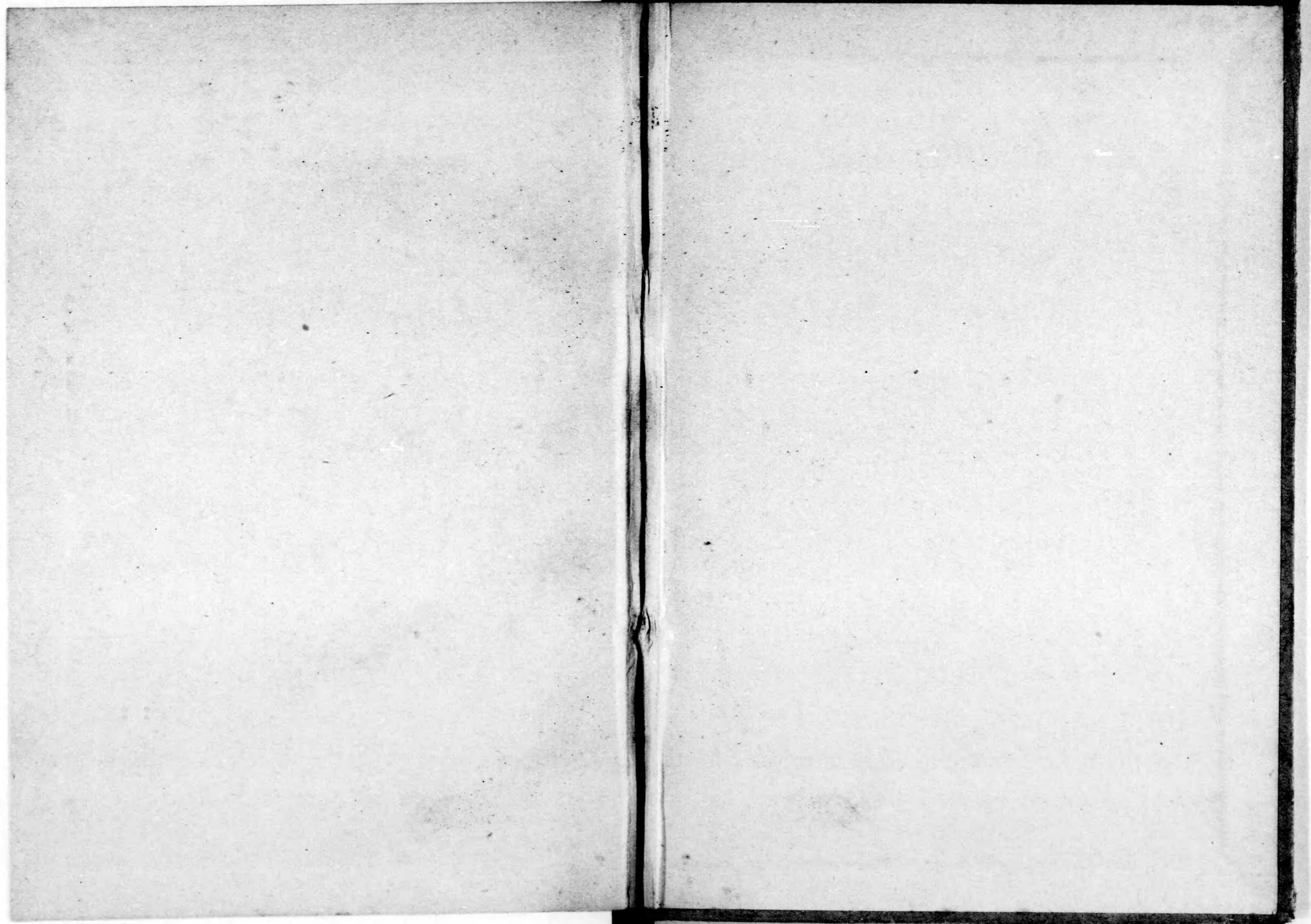
きび手の歌和

兌發堂盛東



始





特100
35.



びき

大正
7. 2. 13
内交

和歌の手引

目次

- 一 和歌の作法…………… 一
- 二 和歌の種類…………… 一〇
 - (長歌) (短歌) (旋歌) (廻文) (總題)…………… 一〇
 - (一) 四病…………… 二四
 - (岸樹) (風燈) (浪船) (落花)
 - (二) 八病…………… 三五
 - (同心) (亂思) (蘭蝶) (渚鴻) (花橘) (老楓) (中鏡) (後悔)

三 和歌の起り始め……………一八

四 和歌の作りやう……………二二

(篇、序、題、曲、流)……………二三

(1) 歌の留め字……………二六

(かへる哉。中の哉。ふきながしの哉。)

(同じく哉とめ、らん留め)

(2) 疑ひの詞といふこと……………三〇

(や。いかに。いつく。か。いつれ。)

て 留め……………三六

(心の残る。心のかへる。いひながして餘情をふくむ)

つゝ留め……………三七

(程ふるつゝ。ながらつゝ。)

同じ……………三九

すらん留め……………四〇

らし留め……………四一

(3) 切れ字……………四九

五 歌には必ず切れ字を仕ふこと……………五一

(1) 詠歌制の詞……………五二

【卅六文字の歌】……………五六

【卅五文字の歌】……………五七

【卅四文字の歌】……………五七

【一の句七字の歌】……………六七

【三の句七字の歌】……………六七

六 虚字の言葉……………六六

七 實字の言葉……………六〇

八 親句、疎句……………三三

九 隔れ句……………三三

一〇 枕詞……………一三四

一一 古今和歌の説明……………三六
(春。夏。秋。冬。戀。旅)

一二 故緒のある歌……………一七三

和歌の手引

歌道普及會編

(一) 和歌の作法

歌を作るときは先づ題をえらびて、それからその意のある處をよく考へ、この題にてこの言まはしはよきか悪しきかを調べなければならぬ。この題をえらぶには種々なる慣習がある。今これにつき細川幽齋細聞書にあることを抜萃をする。『一字題などをはすやうあるさまにのみなしいく度も題を下句にあらはすべし二三字より後は題の字を甲乙にわかちておくべし、結び題を一所におく事は無下の事なり又題を頭

2
にいたりきていでたる歌無念と申べし但し又五文字などでは題の字お
かれざらんは制の限にあらす」と云々いつてある。爾して「いそのか
みふるに神杉ふりぬれど色には出し露。時雨も」とは題をまはした歌
である。それから結び題をもまはして詠むべきである、たとへば『野
虫をやかてのべに鳴く虫』と詠み、山鹿を『やかて山になく鹿』と詠
むといふは雅の至りである。この結び題の歌に、池水平水と題せるが
ある。

池水をいかに嵐の吹わけてこぼれるほとこのほらさるらん

古今集

爾して一字題には、

山姫のやさしの玉のをよはみみたれにけりなみゆる白つゆ
これは露と云ふもの一ツをいつた事である。此などは雅といふべき
である、然し題を頭につけたならば下句が弱くして歌尻の枯れたるも
のといふのである。

それから結題に虚字實字といふことがある。假令ば『野外』の外『江
上』の上の字等である。『野徑』の徑字は詠んでも悪しくはない。

野 雲

後撰拾 右近中將師良

かすかのに消にしきりの跡とめて雪路分る道をしらばや

3
とある。その外、雨中、雪中の中の字、海邊の邊の字、これは皆其の
所をあらはすすめの文字であるから、一體この字は自然に出る字であ

4
る、故にこれを虚字といつてゐる。又實字と云ふことは、依忍増戀の依の字の如く、これはてにをばの字であるが實の字である。

新古今

春宮大夫公綱

しのはしよ岩ま傳ひの谷河もせをせくにこそ水まさりけれ
と、かういつたことは容易のこのやうに思ふが大事なことであるか
らよく注意せざればならぬことである。若しかやうなる字を読み
損じては歌人としての恥である。大方の題は誰でも知つてゐるけれど
も此依の字にて萬の題の實字を知らなければならぬ、若し又題が出で
その題の心を解しかねたならば、その座中の巧者な人に尋ねて題と姿
(歌)の合つてゐるやうに作らなければならぬ。

依雨増戀玉葉

小侍従

たのめしをまつよの雨の明かたにをやむしもこそいらくまこゆれ
この外に傍題といふことがある。このことは題のものではなくて異
物を読み副ふることである。たとへば鹿の題に紅葉を副とするやうな
ものである。

鹿の題

經盛卿

嶺に鳴鹿の音遠く聞ゆなり紅葉吹おろすよるの嵐に

天徳花山院年號なり此時の歌會に

朝忠卿

花だにもちらて別る、春ならばいとかくけふはをしましさらまし

5
と、是花を読み入りたるを傍題といふのである。此くの如く暮春の題

に花などの副ふるはよく、然し鶯と題して時鳥は悪しきことである。この外に雑題に季を読み入るゝことがある。それで雑題に季を読むは悪いといつた人もあるが、季を読んでも差し支えないと思ふ。その當時の季ばかり讀むにあらすして、過去現在未來の季をも讀み入れてさしつかないものである。

永久二年五月松尾歌合社頭雜

定家卿

神垣やゆかみの方はつれなくて秋にそあへの葛のうら風

建保五年五月歌合松經年

定家卿

手向草冬もいく世か契りおきしはま松かえの色もかはらす
それから經文を題として讀むべき歌のことをいふに、これは大方そ

へ歌、なつらへ歌に讀むべきものであるが、經のまゝであつたならばたゞこと歌にでもある。それでこのそへ歌といふことは風の歌である。それでこれはその意をかくして外の物にてその理をいひ述ぶるものである、つまり諷刺歌のやうなものである。又たゞこと歌とは雜の題である、これは物にもたとへず、類例をも曳かず、その理を名のまゝにいふのである。

法華經序品 廣度諸衆生 其數无有量

新古今釋嚴

皇太后宮大夫俊成

渡すへきかすもかきらぬ橋柱いかに立けるちかひなるらし

これは言葉にかへてゐる歌である。

隨喜功德品 最後第五十 内一偈隨喜

谷河たにかはの流れながのすえを汲人くひひともきくはいか、はしるし有ありけり
これは慈童じどうか古事こじの菊きくをいふ字じを聞きの字じによせて歌うたつた同詞どうしにか、
つたものである。

安樂行品 深入禪定 見十方佛

しつかなるいほりをしめて入いりぬれは一方かたならぬ光ひかりをそ見る
これはたゞこと歌うたである。すべて經文きやうもんの題だいは大切たいせつな物ものだといつてあ
る。

爾そして水郷すゐがうといふ題だいには、水野みづのの里さと、淀よさ、吉野川よしのがは、近江あふみなどを讀よみ
入れてよいのである。然しかし海うみをも詠よんだものなきにしもあらずである。

水郷春望

新古今 秀能

夕月ゆふつき夜よ鹽しほみちくらしなにはへの蘆あしのわかはを越こる白波しらなみ
海うみといふ題だいに浦鳥うらとり、渚なぎさなどを詠よむはよろしいが、浦鳥うらとりといふ題だいに海うみ
を讀よむはその意いかはるのである。

山やまといふ題だいも、嶺みね、岡おか、谷たになどを讀よむはよいが、峯みね、岡おか、谷たにといふ
題だいに山やまと讀よむは悪あしきことである。

爾そして題だいの字じを現あらはさずして讀よむことあり、

落葉満水

新古今冬部

藤原祐宗朝臣

笈いかだしよまで事こととはん水上みなかみはいかはかりふく山やまのあらしそ

(二) 和歌の種類

長歌、短歌、旋頭、混本、廻文、隱題、これは和歌の品位の大別である。

(長歌)、とは三十一文字の歌である。

(短歌)、とはすゝろに句あまれる歌である。爾して義によつて長歌は短歌なるのである。

(旋頭)、とは三十一文字の歌の五文字でも七文字でも一句あまつてる歌をいふのである。

(廻文)、とは三十一文字の歌を上から讀むも下から讀むも同じことに讀むことのできる歌をいふのである。

(隱題)、とは胸と云ふべきことを讀みかくすことである。

旋頭歌

かのをかに草かるをのこしかなかりそ

あうつゝも君かきまさまむみまくさなせむ

ますかゝみそこなるかけに向ひいて

みる時にこそしらぬ翁にあふ心地すれ

混本歌

あさかほの夕かけまたすちりやすき

花の香そかし

廻文歌

(下の句の終りからよむもおなじである)

むらくさにくさのはなもしそらはらは

隠題歌

なそしもはなのさくにさくらむ

おどししもこそも今年も咲く花を

その日ちりきとしる人そなき

この外に折り句、俳諧といふ物もある。

(香冠の折句)、とは五七五七七の上下に思ふ事をいふのである。

(冠)、とは五七五七七の頭に思ふことをいふのである。

(俳諧)、とは狂歌ともいつてゐる。

香冠の折句の歌、あはせたまものすい、しこいふこと

あふ坂も はてはゆきくの せきもいす

冠の歌、いふことを

たつねてとひこ きなはかへさし

ここの葉も ときはなるとは たのまなん

まつはみよかし へなはちるやと

俳諧の歌、

秋の野になまめきたてる女郎花

あなことくし花もひとつき

には鳥はいくらのいねをもたやらん

あかつきことにこけくとなく

此のやうな様は一通りではない、が今の世に好んで讀む歌は長歌で

14 ある。この長歌に四つの病と八つの病がある。

(一) 四病

岸樹、風燈、浪船、落花、この四つである。

(岸樹)、とは一句の初めの一字二句の初めの一字は同じ字である。
うくひすも、うきことありや花の枝に

ねくらさためてなをもなくらん

(風燈)、とは初めの句の二字目と二句の二字目は同じ字である。

いくしくれそめてきつらんなかめける

たかねにいろのふかきもみち葉

(浪船)、とは初めの句の四字目と、二句の六字目と同じ字である。

ひさかたの月みるをたのかりまくら

ねられぬまゝに袖を露けき

(落花)、とは毎句に同じ字のあるものである。

おりからも、おもへはをしき おほかたの

よのならひかは命もろさは

(二) 八病

同心、亂思、蠟蝶、渚鴻、花橋、老楓、中鈍、後悔、是れである。

(同心)、とは文字は變つてゐても意は同じいものである。

(亂思)、とは初の句の初めの字と四句の初の字と同じものをいふのである。

こひしさは同じ心にあらずとも

こよひの月を君みさらめや

(蝴蝶)、とは初の五字目と終りの一字と同じである。

櫻ちる木の下風はさむからて

空にしられぬ雪をふりける

(鶺鴒)、とは三句目の終りの字と五句目の終りの字と同じいもので

ある。

ほらへつゝやへ山吹はさかななん

後のかたみにもみむ

(花橋)――

花橋は美しいが、葉は甚だ悪いといふことであるから、正と詠むべきものは、詠み隠しするのである。要するに、歌の姿は、たいさう美しいけれども、その心は悪いといふことである。

(老楓)――

老いたる桂といふことで、正と詠むべきことである。

(中鈍)――

五文字と六文字に詠んで、七文字を八文字に詠むべきをいふのである。

(後悔)――

歌を詠んで、後に思ひつき、完く字をえらばなかつた、苦かつた

ものだと後悔こくごすることをいふのである。

述懐

(古歌) 俊成

うき夢うきゆめはなこりまでこそ悲かなしけれ

このよの後ものちなをやなげかん

我が罪つみをいさふて

(今世歌) 以奉

まかつみをいさふて君きみにすかるらん

千代ちよへしいはほわれをかくしれ

(三) 和歌の起り始め

歌謡うたといふものは何時いつの時代じだいにもあるものである、野蠻時代やばんじだいには、野蠻時代やばんじだいの人の意いを表あらわした歌うたがある、それで日本にほんでも、神代じんだいの時ときから歌うたとして唱となへ、勇ゆうを鼓舞こぶしたものである。

天照大神あまてらすおほみかみの岩戸いわいほにかくれ給たまひし時に歌うたはれしものも歌うたである、が、後世こうせいのやうな正しい姿すがたの歌うたではない。なれども、素佐之男尊すさのをのみこと、出雲いづもの國くに、簸ひの川上かはかみに到いたり、櫛名田姫くしなだひめと、一所しよに住すみようとして、須賀すがの宮みやを造つくり給たまひし時とき、雲くもの立たち上のぼりたるを見みられて、詠よみ給たまへる歌うたの、

八雲立やくらたつ、出雲八重垣いづもへがき、妻つまこみに

八重垣へがきつくるその八重垣へがきを

は姿すがたを新あらたにし、一面目めんめくを施ほどこすに至いたつたのである。その後のち、神武天皇じんむてんのう

兄猪を誅し給へる時、詠み給へる歌、

宇陀の 高城に しぎわな張る

我がまつや

鳴はさやらず いすくはし

鯨さやる

こなみか なこはさば

たちそばの實の

なけくを こさしひるね

うはなりが

なこはさば いでさかき實の

多けくを

こさだひるね

この歌なども、古いものであつて、その時の感情を遺憾なく漏らし
たものである。

此くの如く人皇の御代となつては、神武天皇を始めとして、天子皇

后にすぐれた歌讀みが少くないのである、がこれらは勿論歌人とし
文學者として視るべきものではない。此くの如くその當時歌を作るこ
とは容易であつたから、これを對話の時にも用ひたのを見ても知るこ
とができるのである。唯だ意の任に思ひを發表したものに過ぎない故
に、修飾する詞もなかつたやうに思はるゝのである。それが萬葉の時
代となつては、枕詞などもできて、歌の姿を修飾し、餘韻を湛えるや
うになつたのである。そして明治以降の歌の姿は、一新し、むき出し
のまゝに力を入れるやうとはなり、漢字も和歌に用ひるやうとはなつ
た。然し舊派は幾分か昔の姿を存してゐるが、平安朝の歌謡とは、餘
程違つてゐるのである。そして上古は歌には種別はなかつたが、俳句

狂歌、狂句、新體詩など、種類ができたのである。

要するに、八雲立つの歌は、三十一文字の和歌の鼻祖と稱せらるゝもので、即ち五言、七言、五言、七言、七言と、排列せられて、おのづから歌曲をなしたのである。かくて又神武天皇の、

みつ／＼し、久米の子らが、垣本に、粟生には、かみらひともと、そのがもと、そねめつなきて、撃ちてしやまむ。

みつ／＼し、久米の子らが、垣本に植ゑしはしかみ、口ひびく、われは忘れず、撃ちてしやまむ。

と、神武天皇は、叡聖文武におはせしこと、今更らいふを要しないが、そのみ歌の如き、枕詞を置き、對話を設け、そして雄大奇警なる

比喻により、巧に人の思想、感情を支配し給ひしことのいふも畏しといふべきである。その他、記紀の二書に載せてある、上古の歌謡は少なくはないが、神武天皇の御歌に比ぶべきものは、日本武尊の、東征の際の、

新治筑波を過ぎて、幾夜か寝つる

かくなべて夜にはこの夜日には十日を

と、贈答したまひしものは力の強いものである。そして此れは後世連歌の、濫觴と稱せらるゝに至つたのである。

和歌は、此くして起り、かくして生長したものである。そして今後幾星霜の後は、風俗習慣が變つて、和歌も亦如何にか化つて行くので

あらう。

(四) 和歌の作りやう

和歌の作りやうは、先づ題を定め、思ひをねらねばならない、それだけでなくとも境遇に支配されて、我が儘な和歌のでがちである。尤も意の任のものでよいのであるが、篇、序、題、曲、流の歌ひ込みを忘れてはならない。

(篇)、とは修飾語の一種で、その歌の主題に對する、準備の言葉である。つまり咳拂ひをして演説をするやうなものである。

『駒どめて』は篇である。

(序)、とは、その歌の大體の意味や姿を現すもので、文書ならば、

序文である。

『なほ水かはん』は序である。

(懸)、とは、その歌の主題で、文章でいはい、文題である。則ち題を定めこの意味は、此の題のことである。

『山吹の』は題である。

(曲)、とは、その歌の姿をみやびやかにする時の一寸と曲つて見た雅曲である。

『花のつゆそふ』は曲である。

(流)、とは、その歌を雅に、餘韻のあるやうに流し、水の流れを遠

くから見るやうにすることである。

「井出のたま川」は流である。

右の歌の題は、水邊の山吹といふので、藤原俊成の詠まれたもので、新古今集にある歌。

駒とめて、なほ水かはん、山吹の

花のつゆそふ、井出のたま川

といふのである。そうしてこれは純なる篇序題曲流である。

我が庵は都のたつみしかそすむ世を宇治山と人はいふなり

そして又篇、序、題、曲、流は、並字のやうに、必ずしも並べなけ

ればならんといふことはない、流、曲、題、序、篇になつても差し支

へはない、或るひはあちこち、こちあちになつても差し支へないが、必ず篇、序、題、曲、流の趣きを読み込まなければならん。

土佐日記より

みなそこの月のうへより漕く舟の

棹にさはるはかつらなるらん

かけ見れば波の底なる久方の

空こきわたるわれそわひしき

柿本人麿

さゝなみのしかの唐崎さきくあれど

おほみやひとの舟まぢかねつ

さゝなみの志賀の大海淀むとも
昔の人に復も逢はめやも

平忠度

君はまたとほくはゆかしわかそての
たもとの涙ひえしはてねは

素性法師

いそのかみふるき都のほととぎす
聲はかりこそむかしなりけれ
それから歌を書く時は、必ず、濁音の點をうつてはならぬものである。

(1) 歌の留め字

(哉)、留めにはいろくの習ひがある、があらましをいへば、『かへる哉』『中の哉』『ふきながしの哉』の三つである。

『かへる哉』とは、心のかへる哉である、たとへば、

君かためおしからさりし命さへ
長くもかなと思ひける哉

といったやうなものである。

それで此の歌は、藤原よしたかの詠まれた歌で、後拾遺に載つてゐるものである。そしてその註釋によれば、ある女の許より館にかへり、あまりなつかしさに、明くる朝、女の許につかはしたも

のであるといつてゐる。してその歌の心は、君がためには、唯だ
 一つの命でさへも惜しくはないと思ふに、お許に逢へば、あかぬ
 心故、一時でもいゝから命を延して逢つてゐたいと思ひける哉、
 かくは思はざるべき事ある哉を、心のかへり處あるによつて、
 かへる哉といふのである。

それから『かな』はがなで、物を慾求する意である。

『中の哉』とは、三四の句にあるを中の哉といふのである。たとへ
 ば、

かしまる袖に涙のかゝる哉

又いつかはとおもふ衣に

かしまりてまかり申し玉へなんとするより袖に涙のかゝる哉
 と、打出るより、首尾したる十七字なるを、その餘意をいひそへ
 て、その心を確かにしたのである。

『ふきながしの哉』とは、心の紛らぬ哉である。たとへば、

さくら咲く遠山どりのしたりをの

長かくし日もあかぬ色哉

又心にさもくと打ちなげくやうな哉もある、たとへば、
 風をいたみ岩うつ波のをのれのみ

くたけて物を思ふ頃哉

此の外『ぬる哉』『つる哉』といふには、まへのものよりは心が單つ

てゐる。『ける哉』といふは、當意の心である。凡そ哉とめにかゝるの、てにをはなく、かくいひてとまるといふ、格式もなく、たゞ上よりよくうつりてきびしく留りたるは一首の歌つよく聞え、又うつり悪るかつたならば、殊の外尾枯に聞ゆるものである。

同じく哉とめ

歌に『つゝとめ』『哉とめ』とて大事のことにいへども、二色に心得ておけば、別の事はない、其の二色とは、かなといふに重さと軽さとの事である。軽さとは、

櫻さく遠山鳥のしたりをの

長くし日もあかの色哉

といつてゐるのは軽さといふのである。又重き哉とは、

君か代に逢へるは誰れもうれしきに

花は色にも出にける哉

と讀んでゐるのは重き哉である。哉とめの習ひだといつて昔は秘密にしたものであるが、此の二つの哉、今は何れの本にも見えるやうになつた。そして歌には此の二つの外、外には心得となるべき『哉』はない。

らん留り

らんとまりは、大體上に疑ひの文字を置いて、らんと留めるのである。又上にやと置いて下にてらんと發ねかへし留めるのである。但し

上に疑ひの言葉あればやと置くことも苦しくはない。

(2) 疑ひの詞といふことは、

いかに、なに、たれ、なり、いつ、いつく、いかで、いく、いつれ、か、かは、かも、たそ、などの類である。たとへば、

(や)、上にやと置いてらん留りの歌、

春日野の若菜つみにや白妙の

袖ふりはえて人の行くらん

(いかに)

雪とのみふるたにあるに櫻花

いかに散れとか風の吹くらん

(いつく)

今日とあくどめかれぬ物を櫻花

いつくのくまに移ろひぬらん

(か)

大空は戀しき人のたたみかは

物おもふことになかめらるらん

(いつれ)

山かくす春のかすみそうらめしき

いつれ都のさかひなるらん

又前のごとく上に疑ひの言葉もなく、たきやとも置かないで、ら

んの留めもある。たとへば、

夕方の光りのとけき春の日に

しつ心なく花の散るらん

春日野に若菜つみつゝ君か代を

いはふ心は神を知るらん

是れは心の中より花の心、又、神の心を推しはかつたらんである。

て留め

て留めに三つ種別がある、一つは詞の外に心の残るもので、又の一つはよい心のかへるで文字がある。も一つは、てといひながして、餘韻を含むものである。

(心の残る)、といふのは、たとへば、

よしさらはちるまては見し山櫻

花の盛を面影にして

(心のかへる)、といふのは、たとへば、

日暮れはあふ人もなし正木ちる

峯の嵐の高はかりして

(いひながして餘情をふくむ)、といふのは、たとへば、

俤のひかふるかたにかへりみる

都の山は月ほそくして

つゝ留め

つゝといふに二つがある。『程ふるつゝ』ながらつゝ『これである。』

(程ふるつゝ)、といふことは、つゝといひて日かすを経たる心、つ

まり間を置いてある心をふくめたことである。たとへば、

田子の浦に打ち出て見れば白妙の

ふしの高根に雪はふりつゝ。

此の歌は、ふりつゝ／＼と心のつゞきて程ふる心がある。是れすなはち程ふるつゝである。

(ながらつゝ)、といふことは、たとへば、

秋の田の苧り穂のいほの筈をあらみ

我か衣手は露にぬれつゝ。

此の歌は、我が衣は露にぬれながらといふことなれば『ながらつゝ』といふのである。

同じく

つゝといふ心に二つがある。富士の高根に雪はふりつゝといふは、心にいひ残した心をつゝと言葉にこめて讀んだものである。田子の浦に出で見れば、富士の高根の雪の面白さ、田子の浦の景氣の面白さ、なんともいふことはできないけしきである。いひふくめてつゝつけたのである。

あすからはわかかなつまんとしめし野に

きのふもけふも雪はふりつゝ。

といふ歌は、上へかへして歌の意味を知るべきである。そのいふ心は、かやうに雪の降つては、若菜摘むべき、遊びもできないであらうか、何うしやうと、上へかへして置いたつゝである。

すらん留め

夏はつる扇と秋の白露と

いつれかさきにおかしとやすらん

と俊盛の詠めるも、おくとやすらんをおかしとやすらんと、置きありさうな心を持たせていつたのである。『すらん』は、するならんのこと

とで、するなるべしといふことである。

『すらん』留めの歌は此の心を以て詠むのである。

らし留め

『ふるらし』『さくらし』『ぬらし』、此の類ひは皆さもあらうやうにいひふくめたことである。

立田川紅葉はなかれ神なひの

三むろの山に時雨ふるらし

この川に紅葉はなかるおく山の

雪けの水そいままさるらし

あすか川もみちは流るかづらぎの

山の秋風吹きまさららし。

こそ、けれ、ぞける

こそ、けれ、ぞけるといふならひも、上にこそかゝれば、下に於てれと結び、上にぞかゝれば、下に於てると結ぶのである。

(こそ、けれ)

八重葎しげれるやどのさひしさに

人こそ見えぬ秋はきにけれ

(ぞける)

ふるさとは見しこともあらずをのゝえの

朽ちし所ぞ戀しかりける

然し歌によりて、こそとかゝつてもるととまることもあるし、へがで留ることもある。

(が) 戀すてふ我名はまだきたちにけり

人知れずこそ思ひそめしか

(へ) なかからん心も知らず黒髪の

みたれて今朝は物こそ思へ

待ちもこそすれ

これは、待ちもせんとすれどと末を重ねていふ言葉である。

今宵こん人にはあはし七夕の

久しき程に待ちもこそすれ

此の歌は、ちと聞き悪い歌であるが、この歌の心は、今宵は、七夕のことで、星を待つ夜であれば、若しかの人の尋ねきても、それには逢はれまいか、もし今宵彦星(戀人)に逢ひそこねたら、又來年の七月七日まで、久しい間逢はれない、そうすればかの人の心は變るぢやあるまいかといふのである。

(みらん)「や見ん」『みるらん』といふ意味である。又「や見ん」また見んか』といふことは、又見まいかといふ心を含んだものである。

それで俊成卿の歌に、

又や見ん交野の峯の櫻がり

花の雪ふる春のあけほの

此の歌も、かやうにおもしろい事は、又見ることのあらんか、もはや斯やうのことはあるまいといふ心をふくめて讀める歌である。(ならなくに)

これもかへした詞である。柿本の人丸の歌に、

渡し守はや舟かへせ一とせに

二たひきます君ならなくに

此の歌は、年に二度こられない君であれば、早く歸へられぬやうに、舟をかへしておけといつた心である。

みちのくの信夫もしすりたれゆるに

みたれそめにしわれならなくに

此の歌は、亂れゆるにみだれたるぞ、われにてはない、君ゆるに亂れたのであるといふことである。

(なん)といふことには二つの義がある。一つは治定で、一つは下知の義である。

やかすとも草はもえなん春日野は

たゝ春の日にまかせたらなん

此の歌の、草はもえなんとは、草は自分から萌えいでやうと、治定していつたのである。春の日にまかせたらなんとは、野を焼には及ばない、春の日に任せて置いたならば、自ら萌えると、人に下知をする意である。

(ざらなん)

野とならうつらと成りて鳴居らん

かりにたるやは君はこさらん

此の歌の心は、野となつたならば、君はかりに來ないとは有るまいと、それだから、うづらとなつて何日まで待てるやうとである。やはは發ね返りの意があつて、つまり、君はこないことはあるまい、必ずくるねといふやうなことである。

(ざらなん)

山田さへ今はかへすをちる花の

かことはたれもおほせさらなん

此の歌は、少しくですぎた歌ではあるが、とにかく山の耕返へす頃は、春の末で長閑な時である。それなのに花の散るは、風にかこつけて散るが、誰に仰せて散るぞ、といったのである。かやうに風もなく、光長閑き折りふしに、散る花は、己が心からではあるまい、それ故、風になり、人になり、恨みを残して散れとの歌の心である。此の歌もさうである。

久かたの光りのとけき春の日に

しつ心なく花の散るらん

そうしてその『ざらなん』は、矢張り下知の意である。『かたらざらなん』は、かたれといふ心であるし、仰せざらなんは、仰せよとい

ふことである。然し仰せざらんは、仰せぬぞといふことである。こゝに於て切れ字を述べるべく、心してきたから述べる。

(3) 切れ字

(哉)、月の秋はなの春たつあしたかな。

(は)、いつもさらはさかさらましをほとくさす。

(し)、さえし夜の河音おほし朝霞。

(や)、山やあらしはなの波たつ春のうみ。

(ろ)、花さけといはぬはかりそ雨の聲。

(か)、花の枝もかくなるものか夏木立。

(も哉)、ほとくさす遠山ならぬこゑもかな。

- (もなし)、春たては花の色みぬ木々もなし。
 (ぬ)、秋更けぬ松のはかたのおきつ風。
 (けり)、みる人を風も待ちけり花さかり。
 (こん)、明日もこん比ははなの、小鷹かり。
 (じ)、もみちせぬ秋もうらみじ雪の松。
 (さろ)、夜半の月さそすみの江の夕かすみ。
 (を)、松風もほにいつる秋を萩のこる。
 (よ)、梅かりよいろはちしほも染つべし。
 (いさ)、にはよりに匂ふ木もいさ梅の花。
 (いかて)、春と秋どいかてわか葉のうすもみち。

- (ころ)、花の水山こそちしほしかのうら。
 (いつれ)、雪いつれ庭の卵の花おそさくら。
 (いく)、みにもあらぬとやまいく重あさ霞。
 (下知)、今朝散るにならひて散るな去年の雪。
 (いつ)、そめはいつ山はかすみの浅緑。

(四) 歌には必ず切れ字を仕ふこと

一つの歌には必ず切れ字がつくものである、然し二つの切れ字は厄
 ことであれば仕はないやうにしなければならん。

第一の句で切れた歌、

さへ侘ぬ、うつろふ人の秋の色に
みをこからしの森の下露
第二の句で切れた歌、

夢にてもみゆらん、物をなげきつゝ
打ちぬるよひの袖のけしきは

(4) 詠歌制の詞

かすみかねたる

今朝みれば雲も櫻も埋れて

かすみかねたるみよし野の山
花のやどかせ

家 隆

讀人不知

おもふとちそこともしらす行きくれぬ

花の宿かせ野へのうくひす

うつるもくもる

難波かたかすまぬ浪もかすみけり

うつるもくもる朧月よに

嵐をかすむ

大坂や木するの花を吹からに

嵐をかすむ關の杉村

月にあまきる

山高み峯のあらしにちる花の

具 親

宮内卿

讃 岐

月にあまきる明かたの空
霞におつる

寂蓮

くれて行く春のみなどはしらねども

霞におつる宇治の柴船

むなしき枝に

攝政

よし野山花のふる里跡たえて

むなしき枝に春風そ吹く

花の露そふ

俊成

駒留めて猶水かはん山吹の

花の露そふ井手の玉川

花の雪ちる

讀人不知

またやみむかたのゝみのゝ櫻かり

花の雪ちる春のあけほの

みたれてなひく

大

春風の霞吹きとくたえまより

みたれてなひく青柳の糸

雪の玉水

式子

山ふかみ春とも知らぬ松の戸に

たえくかゝる雪の玉水

空さへ匂ふ

守覺法親王

吉野山よしのやま花はなの盛さかりやけふならん

空そらさへへにははふ嶺みねのしら雲くも
浪なみにはなるい

霞かすみたつ末すえの松山まつやまほのくと

浪なみにはなるく横雲よこぐもの空そら
涼すずしくくもる

かられつる野のもせの草くさのかけるひて

涼すずしくくもる夕立ゆふだちの空そら

雨あめのたくれ

うちしめりあやめそかほる郭公ぼくしき

家隆

西行

攝政

なくや五月さつきの雨あめのたくれ

きのふはうすき

小倉山せぐらやましくるく比ひらの朝あさな朝あさ

きのふはうすきの峰みねの紅葉もみぢは

ぬるともをらん

露つゆしくれもる山陰やまかげの下したもみち

ぬるともをらん秋あきのかたみに

ぬれてやひとり

下紅葉したもみぢかつちる山やまの夕時雨ゆふしぐれ

ぬれてやひとり鹿しかの鳴なくらん

定家

家隆

読人不知

かれなて鹿の

あらし山色かはり行く秋風に

かれなて鹿の妻をこふらん

尾花なみよる

鶉なく眞野の入江の濱風に

尾花波よる秋の夕くれ

露の底なる

跡もなき庭の淺茅にむすほられ

露のそこなる松虫の聲

月やをしまの

知家

俊成

式子

家隆

秋のよの月やをしまの天の原

明かたちかき沖の釣舟

色なる波に

明日もこん野路の玉川萩こえて

色なる波に月やとりけり

色なる波に

玉川の岸の山吹かけ見えて

色なる波に蛙鳴くなり

霧立のほる

村雨の露もまたひぬ楨の葉に

俊成

後鳥羽院

寂蓮

霧立ちのほる秋の夕くれ

わたれは濁る

散りかゝる紅葉の色は深けれど

わたれは濁る山川の水

わたらぬ水も

立田川あらしや峰によはるらん

わたらぬ水も錦たえけり

こほりて出る

しかの浦や遠さかり行く浪まより

こほりて出づる有明の月

讚岐

宮内卿

家隆

定家

慈圓

定家

攝政

嵐に曇る

小初瀬や峰のときは木吹しほり

嵐にくもる雪の山本

やよ時雨

やよ時雨物おもふ袖のなかりせは

木の葉の後に何をそめまし

雪の夕くれ

駒とめて袖うちはらふ陰もなし

さのゝ渡の雪の夕くれ

雲ぬる嶺の

もらすなよ雲ぬる嶺の初時雨

木の葉は下に色かはるとも

われても末に

瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川の

われても末にあはんとそおもふ

身を木がらしの

さえわひぬうつらふ人の秋の色に

身を木枯しの森の下露

袖さへ浪の

みるめこそいくぬる磯の草ならめ

崇徳院

定家

讃岐

袖さへ浪の下に朽ちぬる

ぬるとも袖の

わか戀は楨の下葉にもる時雨

ぬるとも袖の色に出めや

我のみしりて

忘れてはうちなけかるゝ夕かな

我のみしりて過ぐる月日を

結はぬ水に

おもひあまり入にとはゝや水無瀬河

結はぬ水に袖はぬるやと

後鳥羽院

式子

公實

たゝあらしの

後鳥羽院

おもひつゝ經にける年のかひやなき

たゝあらしの夕くれの空

我が身にけたぬ

前入道太政大臣

富士の根の雲にや今はまかへまし

我が身にけたぬむなし煙を

家隆

きのふの雲の

おもひ出よたかゝねことこの末ならん

きのふの雲の跡の山風

讀人不知

するのしら雲

三吉野のたかねの櫻ちりにきや

嵐もしろき

太上天皇

立かへり又もきて見ん松島や

をしまのとまや波にあらすな

俊成

浪にあらすな

月も旅ねの心地こそすれ

崇徳院

かり衣袖のなみたにやとる夜は

月も旅ねの

空ゆく月の末の白雲

あけは又こゆへき山の嶺なれや

嵐もしろき卒の明ほの
へらなり

貫之

山たかみ見つゝわかこし櫻花

風は心にまかすへらなり

(五) 詠歌の諸體

〔卅六文字の歌〕

二條院讀岐

ありそ海の浪間かき分けてかつく海士の

息もつきあへす物をこそ思へ

〔卅五文字の歌〕

伊勢物語

我はかり物思ふ人は又もあらしと

思ひは水の下にも有りけり

讀人不知

〔卅四文字の歌〕

滄海の沖つしほあひにうかふあはの

消ぬ物からよる方もなし

讀人不知

〔一の句七字の歌〕

いてある駒ははやく行きますませまつち山

待つらんいもをばや行きてみん

季通

〔三の句七字の歌〕

春はたゝ花の匂ひもさもあらはあれ

たゝ身にしむは明ほのゝ空

(六) 虚字の言葉

散るとみて有るべき物を梅の花

うたて匂ひの袖にとまれる

(解) うたてといふことはあまりにと云ふ心でうたいと同意義である。うたゝとは轉のことである。

春の夜のやみはあやなし梅の花

色こそみえねかやはかくるゝ

(解) あやなしはかひなきと同意義である。

山吹はあやなくさきそ花みんと

うるけむ人の今宵こなくに

(解) あやなはあやなしの文字を略したのである。くれはとりあやに戀しくありしかは

二むら山もこえす成にき

(解) あやにはあやにくと同意義であいにくの心である。

いさゝめにおもひし物を田子の浦に

咲ける藤なみ一夜へにけり

(解) いさゝめはかりそめのことである。

夕されは螢よりけにもゆれとも

光りみねはや人のつれなき

(解) けにはそれより勝ると云ふ意義である。勝の字をかくげにす

みて讀むべきである。定家卿のいふには誠にさりけりといふことをけにとつかふは現にと云ふ心である。

おきてみんと思ひしほどに枯れにけり

露よりけなる朝顔の花

(解) この歌のけは勝の字である。

むは玉の夜渡る月のすむ里は

けに久かたの天の橋たて

(解) この歌のけは現の字である。

ことならはさかすやはあらぬ櫻花

見る我さへにしつ心なし

(解) ことならははかくのことくならばの意義である。

秋風にあへすちりぬる紅葉はの

行衛定の我を悲しき

(解) あへすとは不取敢のことである。

見渡せはあかしの浦にたける火の

ほにこそ出めいもに戀しも

(解) ほにはあらはれた心であつて、それを穗にも火にも帆にもよ

せて讀めるものである。

おくれしと山田の早苗とる田子の

玉ゆらもすそほす隙そなき

(解) たまゆらは玉のころである。日本紀に玲瓏とかいてあるし、
八雲抄には玉ゆらはしばしといふ心に仕つてある。

初春のはつ音のけふの玉はつき

手にとるからにゆらく玉のを

(解) ゆらくはのふる心である。

人となる事はかたきをわくらはに

なれる我が身は死も生れも

(解) わくらははたまさかの心である。

いはせ野に秋萩のき駒なめて

初とかりたにせてややみなん

(解) しのきは凌の意である。

おりてみは落そしぬへき秋萩の

枝もたわりにおけるしら露

(解) たわり、とをりは同意義で、たはみたる姿である。

いましはとわひにしものをさゝかにの

衣にかゝり我をたのむる

(解) いましははいましはしである。

藤浪のかけなる海の底清み

しつく石をも玉とわかみる

(解) しつくは石などの波にゆられて現はれたり隠れたりするをい

ふのである。

はなれそなたたる室の木うたかたも

久しき年を過ぎにける哉

(解) うたかたは水のあはのことであるし、今一つの意は寧ろといふ義である。

我心ゆたのたゆたにうきぬなは

へにもおきにもよりやかねまし

(解) ゆたのたゆたは波にゆられ堪ゆたふ意である。いて人はことのみそよき月草の

うつし心は色ごとにして

おもふらん心の程ややよいかに

(解) いて、若葉集には乞の字を書いてあるし、さしもなど、ふ

意に叶つてゐるのである。

露は袖に物思ふ頃はさそなおく

かならす秋のならひならねど

(解) さそなはけにそなといふ意である。

しつはたにへつる程なる白糸の

たえぬる身とは思はさらなん

(解) しつはたはみたれたる心で、しつはた帯は賤が織る機布の帯のことである。

またみぬ人のきゝかなやまん

(解) やよはやゝと呼んだ心である。

あはれともうしても物を思ふとき

なとか泪のいとなかるらん

(解) いとなきはいとまないといふことである。

たましきてまたましよりは竹そかひ

きたることよひしたのもしくおもほゆ

(解) そかひはを井すかひたることである。そかきくもそかひきく

である。

君やこん我れや行かんのいさよひに

旗の板戸もさゝすねにけり

(解) いさよひは猶豫とかき、又不知夜とも書いて、いさよふに同

じく、やすらふの意である。

なけきこそ人いる山のをのゝえの

ほどくしくも成りにける哉

(解) ほどくしくに二つの意がある、一つはうとくしくしきで、も

一つはおどろくしくしき意である。いづれも木を伐る時の音に

よせて讀む言葉である。

瀬の瀬になひく玉のみかくれて

人に知られぬ戀ひもするかな

(解) みかくれは水にかくれたる意である。然し俊頼朝臣はみえか
くるゝ意に歌に詠んである。

窓ちかき竹の葉すさむ風の音に

いとゝみしかき夏の夜の夢

(解) すさむは物のすかりたる意である。定家卿はこれをすさふと
いつた、詞に古人不好詠之と。

白雲に羽うちかはしとふ雁の

數さへ見ゆる秋の夜の月

(解) かはすはまじへたる意である。

郭公初聲きけはあちきなく

ぬし定らぬ戀せらるはた

(解) はたは將とかきて言葉の助けである。

まどうまぬ物からうたてしかすかに

うつしにもあらぬ心地のみする

(解) しかすかはさすがなりしとの意である。

その駒もすさめぬ草となにたてる

みきはのあやめけふや引つる

(解) すさめぬは不愛であり、すさむは愛である。

誰れしかも初音聞らん郭公

またぬ山路に心つくさて

(解) たれしかもは誰かもにてしは詞の助けである。
木へたへはおのか羽風に散る花を

誰におほせてこゝら啼くらん

(解) こゝらはおほきである。

いつはとは時はわかねと秋の夜そ

物思ふことのかきり成りける

(解) いつはとははいつとはの意である。

櫻花今宵かさししにさしなから

かくて千と世の春をこそみめ

(解) さしなからには二つの意がある、一つはさしなから、も一つは

指しながらと云ふ意である。

さゝの葉にふりつむ雪のうれををも

みもどくたちゆく我さかりはも

(解) くたちはわたふくの意で、夜くたちとあらば夜の更け行く意

である。

あは雪のたまればかてにくたけつゝ

わか物おもひのしけき頃哉

(解) かてはかつゝの意である。

よるべなみ身をこそ遠くへたつれ

心は君か影と成りにき

(解) よるへはたのむ緑あるあたりをいふのであつて、よるへの水もその意である。

ひとりして物を思へは秋の田の

稻葉もそよといふ人のなき

(解) そよはさやくと風の吹くこと、又人の心をそよりたてる時の言葉の意である。

村鳥の立にし我名今さらに

ことなしふともしるしならめや

(解) ことなしふともは事もないさまをいふのである。

我宿の梅咲きたりとつけやらば

ことふに似たりまたすしもあらず

(解) ことふにいたりは來るといふに似てるの意である。

わかゆつる松浦の川の河波の

なみにおもは、我戀めやは

(解) なみにおもふは人なみに思ふの意である。

何にをして身のいたつらに老ぬらん

年のおもはん事をやさしき

(解) やさしきははつかしきの意である。俊頼朝臣はてやさしき心に詠んである。

打さらし雪はふりつゝしかすかな

我家のそのに鶯そなく

(解) 打きらしは空のきりわたれる意である。

紫のひともとゆるに武藏野の

草はみなからあはれこそ思ふ

(解) みなからはみななからである。

あられふる深山の里のさひしきは

きてはたやすくとふ人そなき

(解) たはやすはたやすきの意である。

わかせこか衣のすそをふき返へし

うらめつらしき秋の初かせ

(解) うらめつらしはうらかなし、うら戀ひしのうらは心である。

秋萩にうらふれをれば足曳の

山下とよみ鹿の鳴くらん

(解) うらひれはうらふれに同意義で、思ひうれいたる心である。

しなくうらふれも同じである。

天の原ふみとろかしたる神も

おもふ中をはさくるものかは

(解) とろは動である。

秋ふくまに霧立ちわちり明けぬとも

君をはやらし待てはすへなし

(解) すへなしはたよりの意である。
露たにもなたゝる宿のきくならば

なはのあるしやいく代なるらん

(解) なたゝるは名に立つの意である。

高根より出くる水のいはたゝみ

われてそおもふいもに逢はぬ夜は

(解) われてはわりなくしての意もあるし、別れての意もある。

春立ちて梢に消えぬしら雪は

またきにさける花かどそみる

(解) またきは速き意である。

うつたへにあまたの人はありといへど

ゆきて我しもよる獨ぬる

(解) うつたへには打ちつけと云ふ心で、八雲抄の云ふ處ではうち

たへてといふのである。

はしけやし間近き里を雲井にや

こひつゝをらん月もへなくに

(解) まどほは間遠の意で、まちかきは間近の意である。

いとせめて戀ひしき時はむは玉の

よるの衣をかへしてそぬる

(解) いとせめてのいとは最の字を削ぐし、せめてはごうも詮方が

ないからこうしての意である。

夜をさむみ衣ころもかりかね啼なくなへに

萩はぎの下葉したはもうつろひにけり

(解) なへにはさうだからになどいふ詞ことばに同じである。

みかくれてすたく蛙かへるのもろ聲こゑに

さはきそわたるゐてのうき草ぐさ

(解) すたくはあつまる心こころで、萬葉集には多集すたくと書いてある。

津つの國くにのなにはのあしの目めもはるに

しけき我戀わがこひ人ひとしるらめや

(解) 目めもはるに二つの意義いぎがある、一つは草木さうもくの目めのはること、

一ツは目めも遙はるかなるのはるである。

秋あきの夜よは名なのみなりけりあふといへど

事ことそともなく明ぬるものを

(解) 事ことそともなくは何事なにこともいひ出いでたる事こともないの意いである。

つくはねのこのもかものもにかけはあれど

君きみかみかけにますかけはなし

(解) このもかのもは此面このちかめ彼面かのちかめである。

いなせともいひはなたれすうき物ものは

身みを心こころともせぬ世よなりけり

(解) いなせはいやともおうともまたの意いである。又またいなとは親おやの守まもる

女をいふのでせともいふのである。

よそにのみきかまし物を音羽川

わたるとなしにみなれ初けん

(解) みなれは水になる、意で、それを見なる、よせて詠めるのである。

うくひすの木つたふ梅のうつろへは

さくらの花の時かたまけぬ

(解) かたまけぬは片設の書いて、物のありまうけたる心である。又かたく、まけた心にもいつてゐる。

(七) 實字の言葉

あさなけに見へき君とそたのまねは

思ひ立ちぬる草まくらなり

(解) あさなけは朝夕といふことである。

しぬる命いさもやすると心みに

玉のをはかりあはんどいはなむ

(解) 玉のには三ツの心がある、一ツは玉の緒、二には命、も一ツはしばしと云ふ意である。

山田もる秋のかりほに置く露は

いなおほせ鳥の泪なりけり

(解) かりほは一は借庵にして一は蒨穂である。

秋來れは野もせに虫のをりみたる

聲のあやをは誰かきるらん

(解) 野もせは野の面のことにて庭もせ道もせ宿もせも皆同じ意義である。

足引の山谷こえて野つかさに

今やなくらん鶯の聲

(解) 野つかさは野さはであつて、岸のつかさも同じ意義である。月にたふ待つ程おほく過ぎぬれば

雨もよにこそとおもほゆる哉

(解) 雨もよのもよは夜と云ふことで、雪もよも同じ意である。も

よは催すのことなりと一説にある。

夢にたにあふことかたく成り行きは

我やいをねぬ人やわする

(解) いをやすくぬるはいこそねられぬ、いのぬられぬいをやすくねられぬいも皆同である、い文字は何れもぬるの意である、萬葉には寢の字と宿の字を書いてある。

伊勢の海士の朝な夕なにかつてふ

みるめに人をあくよしも哉

(解) 朝な夕なは二つの意義をもつてゐる、一ツはたゞ朝夕のことである。も一ツは朝の食、夕の食をいふのである。

郭公ほこしぎすけさの朝あさけに鳴なきつるは

君わかさくらんかあさいやすらん

(解) あさあけは前まへに同おなじ意い義ぎである。

あたら夜よの月つきと花はなをおなしくは

哀あはれしれらん人ひとにみせはや

(解) あたら夜よは惜おししき夜よの意いである。

こようきの磯いそ立たちならしいそなつむ

めさしぬらすなおきに置おけなみ

(解) めさしは二ふたツの意いを持もつてゐる、一ひとツはあまのいさりする時とき

物もの入いる籠かごである、も一ひとツはめのわらはの名なである。

わかせここか衣ころもはるさめふることに

野のへの縁みどりをいろまさりける

(解) わかせこは古わがせこ妻かと書かいて夫ふう婦ふをいふのである。又また吾わが兒こ子こ吾わが妹い

子こども書かくのである。

たらちねのおやのそふふの桑くわも猶なほ

袖そでかへるきぬにさると云いふ物ものを

(解) たらちねはたらちめにて父ふ母ぼのことである。

いにしへのしつのをたまいやしきも

よきもさかりは有あし物ものなり

(解) しつのをたまいきは二ふたツの意い義ぎがある、一いっは苧ををうみたるへを

をいふのである、も一つは賤しき人をいふのである。

今はとてあきはてられし身なれども

きりたち人をえやは忘るゝ

(解) きりたち人はへたてたる人をいふのである。今一説には、きりくといえ忘れぬといふことである。

かの岡に萩かるをのこなはをなみ

ねるやねりそのくたけてそおもふ

(解) ねりそは繩のない時に木草の枝を捻りて物を結ふことである。心かへする物にもかりた戀は

くるしきものと人にしらせむ

(解) 心かへは自分の心を他人の心にとりかへることである。

ますらをのささる心も今はなし

戀のやつこに我はしぬへし

(解) こひのやつこは戀に仕はるゝ意である。

櫻かり雨はふりきぬおなしくは

ぬるとも花の陰にかくれん

(解) 櫻かりは櫻を尋ねて見ると云ふ意である。柴かり竹かり、いもかりのかりは皆同じである。

おきなさひ人などかめそかり衣

けふはかりとそたつもなくなる

(解) おきななさひは老ても尙丈夫な人をいふのである。
我が宿のすもゝの花が庭に散る

はたれのいまた残りたるかも

(解) はたれは雪といはなくとも残雪のことである。
玉きはう命にむかふ戀よりは

君か御舟のちからにもる

(解) いのちにむかふは命にひとしきことで、むかふは對するともいふ。

露霜のけやすきわかみ老ぬとも

又こまかへり君をしまたん

(解) こまかへりは老て再び若くなる意である。

年のはにきなく物ゆるる郭公

まけはしのはくあはぬ日のおほき

(解) としのはは年ごとにこのことで毎年との意である。

二なき戀をしすれは常の帯を

三重にゆふへく我身はなりぬ

(解) 三重の帯は身が瘦せて一重の帯を三重に結ふといふことである。

ほり江より朝しほみちによる木つみ

かひにありせはつとにせましを

(解) 木つみは流れに渡した木による芥のことである。
折つればたふさにけかるたてなから

三世の佛に花たてまつる

(解) たふさは手である。

なら山のこのてかしはのふた面

とにもかくにもねちけ人かも

(解) このてかしは小兒の手に似た柏の葉のことである。然し一説には、大とちと云ふ草で、此の草は女郎花に似て、花の白く咲くものたといつてゐる。

あゆの風いたく吹らしなこのあまの

釣する小舟こさかへるみゆ

(解) あゆの風は越俗語に東風をあゆの風といつてゐる。

めひ川のかはの瀬ことにかゝりさし

やそどものをば鵜川たちけり

(解) 八十どものをば八十は心の多いことで、とものをば伴男と書くのである。

丈夫は友のそめきになくさむる

心もあらん我そくるしき

(解) とものそめきのそめきは驂の字を書いてある。

騒がしきの意である。

あまさかるひなにいつとせすまゐして

都みやこのてふり忘わすられにけり

(解) 都みやこの手てふりは都人みやこびとの立たち舞まひである。

おそはやも猶なほこそまためむかひをの

椎しひのこやてのあひはたかはし

(解) ししののここややててはは椎しひのの木きのの小こ枝えだである。

ひうせ川かは袖そでつく計はかりあさき瀬せや

心こころふかせて我われおもへらむ

(解) 袖そでつくは一つは衝つにて水みづの袖そでにつくことである。

も一つは續つにて袖そでをかはずと云いふ意いである。

足引あしびきの山やまさくら戸とを明あけをきて

わかまつ君きみを誰たれかどゝむる

(解) 山やま櫻おう戸との櫻さくらの木きで造つくつた戸とである。杉すいの戸とも松まつの戸とも同じおなじで

ある。

いもか門かど行ゆき過すかてにひち笠かさの

雨あめもふらなん雨あめかくれせん

(解) ひちひちかさかさ雨あめは俄にはかに雨あめか降ふつてきて笠かさも取とられず、袖そでをかつ

て雨あめ覆おひとするの義ぎである。

まどろまぬかへにも人ひとをみつる哉かな

まさしからなん春はるの夜よの夢ゆめ

(解) 夢をかへは夢は醒めきは見る物であるから、夢をかへといふのである。

あひおもはぬ人を見ればおほ寺の

かきのしりへにぬかづくかこと

(解) ぬかづくのぬかは顔の事で、禮拜することである。

たかまどの野へのかほ花おもかけに

見えつゝいもか忘れかねつも

(解) かほ花はうつくしい花といふことである。

あさかかた鹽干のゆたに思へとも

うけらか花の色にてめやも

(解) うけらか花はをけらか花にて開けぬ花である。
降る雪のみのしろ衣打ちきつゝ

春來にけりとをとろかれぬる

(解) みのしろ衣は簑を着るべき替りに着る衣をいふのである。

あまたみし豊の御襖の諸人の

君しも物を思はする哉

(解) とよのみそきは大嘗會の御襖の事である。

(八) 和歌の六病

(同語病)、とは歌一首のうちに同詞の二つあることである。

(同字病)、とは一首のうちにて文字などの折合たることである。

(亂思病)、とは歌の心いひも知らず無心所着のことである。

(風傍病)、とはむねと讀むべき題を空にしてことごとくにかゝることである。

(片題病)、とはたとへば物を二つ讀み入るゝ歌に一つをば稱めて一つをはそしるやうなことである。

(首尾病)、とは上句發端の言葉と下句の尾の字と、ていをはの逆くことである。

(九)贈答の歌の義

贈答の歌の本式は、鸚鵡かへしとて、先方の讀み入れたる詞のある句を、或るいはある句の中のある字を答の歌に讀み入れ返すものである。

る。清行の歌に、

つゝめども袖にたまらぬ白玉は

人をみぬめの泪なりけり

かへし

小 町

をろかなる泪を袖に玉はよす

われはせきあへぬたきつ瀬なれば

大貳三位さどにて侍りけるをきこしめして

雙 冷 泉 院

まい人は心のくともすみよしの

里にどのみはおもはさらなん

御かへし

大貳三位

住吉の松はまつともおもほえず

君か千とせのかけそこひしき

後一條院春日行幸のとき上東門院同行啓ありしを見て

法成寺入道

昔日や契り置きけんかすかの

おなしみちにもたつね行く哉

御かへし

後一條院

くもりなき世の光りにやかすかの

同じ道にもたつねゆくらん

(110)かさね句

かさね句はなるべくさくべきことである。たとへば

足引の山の山鳥もる山も

紅葉せさする秋はきにけり

こんな歌は悪くはないけれども、山、山、山を重ね、鳥、鳥、鳥を重ねるやうな、態度らしく悪い歌を詠むべきではない。何事も美しく歌むは能である、同じやうなことをすると、あの人の真似をしたといはるゝものである。歌林良材に毎句重句とて、西行の歌、いかゝすへきよにもあらはや世をすて、

あなうの世やと更らにおもはん

斯やうの歌は態々詠めは悪いものである。

(二)所に臨んで詠むべからざること

新築祝ひの時や、或るひは戦時の時要塞中に、於て又は城中などに於て、壊るゝとか、破るゝとか、火ありとか云ふやうなことは詠むべきではない。又た亭主に面當がましき、老人の家にて、おひか身など、讀むべきではない。

長明無名抄には、院中にての御歌合に、

せきかぬる泪の川のせをはやみ

くつれにけりな人めつゝみは

此の歌を詠んたばかりて遂にひろめなかつたといふことであるが、

城中にて壊るゝなどいふことは悪きことである。

(二二)述懐の歌

述懐とは思ひを述ぶること、その心掛けにて詠むべきであるが、餘りうらびれたる、いまくしいことは詠むべきではない、然し身一つでうれひの餘る時の歌は別名の事だと、古書にあるがこれさへ餘りなるは悪いと述べてある。

俊 成

いかにせん賤か園生のおくの竹

垣こむるとも世の中そかし

隆

大方おほかたの秋あきのね覺さぶの永ながき夜よも
君きみをそいのる身みを思おもふとて

家 隆

和歌わかの浦うらや沖おきつ鹽合しほあひにうかひ出でる

哀あはれうきみのよるへしらせよ

爲 家

玉津島たまつしま哀あはれとみすや我方わががたに

吹ふきたへぬへき和歌わかのうら風かぜ

定 家

昔こけの下したに埋くづぬ名なをは殘のこすとも

はかなのみちや敷島しきしまの歌うた
初はじりの二首しゆは世よの常つねの述懐じゆつゝくわいの歌うたで更さららにうらびれたいまくしい歌うたで
はない、が後あとの三首しゆは歌道かだうじゆつゝくわい述懐じゆつゝくわいと見えるのである。又また、

僧正 遍昭

みかさ山やまたか高くそのほる雲くもにふく、

嵐あらしになれし道みちに任まかせて

この歌うたを見みれば單たんに憂辛うきつらさのみを述懐じゆつゝくわいの歌うたとすべきではない、右みぎく
の如ごとき大佛だいぶつ法ほふ修しゆ行ぎやうのことをも含ふくめる歌うたもあるのである。又また懐舊わいくわいきやうといふ
ことば往事わかしのことを思しふことである、その歌うたに、

俊 成

むかしたに昔むかしと思おもひしたらちねの
なをこひしきそはかなかりける

爲家

水みづ莖くきの昔むかしのあどに流ながるゝは

見みぬ世よをしのふ泪なみだなりけり

二ふた首うたとも懐なつか舊いの歌うたである。そうして今いまいはんとする行路かうろ柳りゅうの歌うたは、
悪わるい歌うたであるから思おもふべきである。

みちのへのたよりの柳やなぎもえそめて

哀あはれ思おもひのけふりくらへに

(二三)歌うたに讀よむべからざる詞ことば

春はる

(1)主しゅ有いう詞じ

かすみかねたる、
はなの宿やどかせ、
あらしそかすむ、
むかしきえたに、
花はなの雪ゆきちる、
そらさへにほふ、

夏なつ

あやめそかほる、

うつるもくもる、
月つきにあまきる、
かすみにおつる、
はなの露つゆそふ、
亂みだれてなびく、
なみにはなるゝ。

すゝしくもる、

雨あめの夕ゆふくれ。

秋あき

きのふはうすき、
ぬれてやひとり、
おはな波なみよる、
月つきやおしまの、
露つゆたちのほる、
月つきにうつろふ、

冬ふゆ

わたらぬみちに、

ぬるともおらん、
かれなてしかの、
露つゆの底そこなる、
色いろなる波なみに、
わたれはにこる、

こぼりていつる、

あらしにくもる、
雪ゆきのゆふくれ、
木きからしのかせ。

戀こひ

くもるみねの、
みをこからしの、
ぬるともそての、
むすはぬみつに、
わかみにけたぬ、

やよしくれ、
月つきのかつらに、

われてもするに、
袖そでさへなみの、
われのみしりて、
たゝあらししの、
きのふのくもの。

雑ざつ

するのしら雲、
なみにあらずな。

月もたひねの、

(2)一向可除詞

けしき、波しろし、吹あらしかな、みやまへの里、玉のを
やなき、みゆる明ほの、ありければ、おもひせし、こゝちこ
そすれ、ものにさりける、身こそつらけれ、身をいかにせん
花成りかも、みね越し、谷こし、うきうみ。

右に述べたる言葉は、歌に讀むべき詞ではない。

のどまりの歌三首

題しらす

雲林院みこ

吹まかふ野風を寒み秋萩の

うつりも行くか人のこゝろの

夜の歌

定家

むかし思ふね覺の空にすきけん

行へもしらぬ月の光りの

源螢の巻

讀者不明

あらはれていと淺くも見ゆる哉

あやめも知らすなけれけるねの

(二四)詞の太み細み

詞に強い處と弱い處がある、よく認めて強きは一向に續け、弱きも

亦一向に續け、貫ねて、聞き憎くあらぬやうにしなければならん。
五月雨の空もどろろに時鳥

何にをうしとかよたゝ鳴くらん

右の歌にて詞の太み細みは自然と知るのであらう。

ものゝふのやなみへくろふ袖のうへに

霰たはしるのちのしのはら

此の歌で霰みたるい、或るはうちちるといつたならば、歌ではない。
故にこゝでは、たはしるでないならば不可のことである。

(一五)詞の先きにするもの

和歌は思想を先にして、言葉のよさを後にすべきものなれども、然

し、心も言葉もなりたけよく、つや／＼と人の心に、いゝ感じを與へ
るやうにしなければならん、それ故黄門庭訓抄に、歌の心と言葉は鳥
の兩翼のやうだといつてある。

風情を歌ふにしても、心を大切にして詠むべきであるが、詞やすら
かに、えんなる詞で詠むは、詞も心も甚た美しいものである。

(一六)親句、疎句

親句、疎句といふが、そんな物でせう。その親句に二つがある。一
は正の親句で、一は響の親句である。

(正の親句)、とは縁ある言葉に續いた句である。

(響の親句)、には二つあり。五音相通、五音連聲是れである。

「親句」の歌

みへぬまで 歌の腰 たちかくしけり、ほのくくと 五文字 をちのとやま
に 五句のくさりいづれも此のや
うなものである。

こゑすてふ

は山かくれのさをしかも

「疎句」の歌

梅の花それともみえず久方の

あまきる雲のなへてふれりは

疎句とは言葉がつゝかなくとも、意の相通じてゐるものである。爾
して右に掲げたのは疎句であるが「久方の天」といふ處にきては親句
になつてゐるのである。爾して又親句の歌の秀句を掲げて作例とする

のである。

木葉ちる宿はきゝわく方をなき

時雨する夜も時雨せぬよも

(二七) 隔れ句

是れは歌を読むに理窟が勝つて述べることのできない、その所に耳
に觸らぬやうに、枕詞を以て、普通の文句でも、一句入れて下にいひ
だして讀む歌のことである。たとへば、

梅か枝にきぬる鶯春かけて

なけともいまた雪はふりつゝ

此の歌の「鶯なけとも」と續けるやうに聞えるのであるが爾うしては

歌にならないから、此う隔して「春かけて」といつたのである。この「春かけて」と、上の句の「きぬる鶯」で少しく隔れてゐるから隔れ句といふのである。

思ふとち春の山へに打むれて

そこともしらぬたひねしてけり

此の歌の「打ちむれて」といふ處隔れ句になつてゐる。

(二八) 枕詞

(千早振る) は神とか神代とかの詞に對して枕詞であつて、余の歌には冠すべきものではない。

千早ふる神のみやたき音すみて

よしの、おくも春やくるらん

千早振ふ神代もきかす立田川

唐くれなるに水くゝることは

(百々敷や) は古い家などの枕詞である。又普通家といふことにも使ふのである。

百々敷や古るきのきはのしのふにも

なほあまりある昔しなりけり

(足引き) は險しき山に對しての枕詞である。
足引きの山鳥の尾のしたりをの

なかくし夜をひとりかもねん

(ぬは玉)、は黒い物に對しての枕詞であつて、くらき夜の枕詞に使ふのである。

たらちねはかゝれとてしもぬは玉の

我黒髪をなですやありけむ

ぬは玉のやみ路をてらす螢虫

誰かためもやす法の燈火

(久かた)、は重もに空にちいめるもの、枕詞である。

久方の月のかつらも折はかり

家の風をもふかせてしかな

夕方の光りのとけき春の日に

しつ心なく花の散るらん

(佐保姫)、は春の枕詞である。

佐保姫の霞の衣春をへて

たちぬふわさもあえまるらむ

(立田姫)、は秋の枕詞である。

龍田姫いまはの心いかならむ

野にも山にも秋をとまらぬ

(玉ほこ)、は丸い物に對してや、凡ての玉に對しての枕詞である。

(梓弓)、は引くとか引きかゝる、或はいろくに使ふ枕詞である。

梓弓引みひかすみこすはこす

こはこをなそこすはこはそを
かへらじとかねて思へは梓弓

なきかすに入る名をそとゝむる

(一九)古今和歌の説明

堀川百首の中の

よる光る草の螢をあつめても

読人不知

見ぬ世のことを尋ねつるかな

(解)禮記月會に夏草を腐らして螢とするところある。それよりきて

此の歌ができたのである。故に意味も明らかになるのである。

竹取物語

名こりなくもゆとしりせはかは衣

思ひの外に置きてみましを

(解)これはかくや姫が返しに詠んだ歌で、かは衣とは火鼠の皮

の衣である。火鼠は氷の下や上中にあつて、その皮は褥にな

り、防寒になるといつてゐる。

読人不知

わくらはに待つる宵も更にけり

さやは契りし山のはの月

(解)このわくらははそなどいふ義である。それでわくらはに

思ふ人あつたならば、是れは邂逅と書いてまれにてといふこ

とである。

いきてよもあすまで人はつらからし

読人不知

此の夕暮をとははとへかし

おしむへき春をは人にいとさせて

読人不知

空たのめにやならんとすらん

(解)右兩首の人とは我がことをいつたのである。支那の書に「西出陽關無故人」此の故人といふも自分のことである。

読人不知

みなそこに色さへふかき松か枝に

ちとせをかねて咲る藤なみ

(解)此の歌のかねてを注にかけてなりとある。又かけてのうちにかねてといふ心もある。かやうのことはたゞかけてとばかりの所に詠むは真違ひである。

読人不知

あふことを遠山すりのかり衣

きてはかひなき音をのみそなく

(解)定家卿僻案抄に云ふには、きぬなどのすりではないとあるし、或る本には遠山鳥とあり、されどすりの遠山はいはれぬ

る故に、大納言行成卿の本には遠山すりとあるのである。

能 因

うは濱に天の羽衣昔きて

ふりけん袖やけふのはふり子

(解)昔駿河の國のうと濱に天人が天下つて、松の上に遊ぶを見て、その邊の野夫、その舞を學びえて傳へたから、それから駿河舞といふことが始まつたのである。これを東遊びともいふのである。はふり子は舞ひ子のこと、はふりは袖の長い雅なるものである。

匡 房

あふ坂のせきの關守いて、みよ

馬やつたひの鈴聞ゆなり

仲 實

東路のふはの關やのすゝ虫は

馬やにふると思ひける哉

(解)公の使の行つて宿る所をば驛路といふのである、それで公使は官より鈴を賜つて、それを標として驛屋に着く毎に振つて宿るのであつた。七つ鈴があつて、七道の使に賜つたのである。その中に口の缺けた鈴は一つあつたのである。その鈴を貰つた人は道に於て、萬事悪いといふのであつた。

山田やまだもるそうつの身みこそかなしけれ

読人不知

秋あきはてぬれはとふ人ひともなし

(解)この歌は玄賓僧都げんぴんそうづの備中びつちゆうの國陽川くにやうがはといふ所の山寺やまでらにゐて、徳とくをかくし、賤いやしい法師ほしのやうに身みを變かして、土民どみんを相手あひてにし、晝ひるは稻刈いねかりをしたり、夜よは山田やまだの苜蓿かいはを守まもり、又は運はこんで手傳てつたつたりしてゐたのである。秋あきの收入しういれも終をはり、百姓ひやくしやどもの用事ようじもなくなつた時とき、右みぎの歌うたを詠よんだのである。それから田たに人形にんぎやうを作つくつて鹿しかを驚おどすものを僧都そうづといふやうになつたのである。

仲正

我わがか戀こひのかねのみたけのかねならば

彌勒みらくの世よにも相あひましましものを

(解)吉野山よしのやまの金峯山きんぶさんは藏王權現ざうわうこんけんの黄金わうこんを納をさめたといふ山やまであるそれを彌勒みらく出世しゆつせの時とき、三會さんげ説法せつぽうの庭にはに、此この黄金わうこんを取り出いだして敷しいた爲ためだといつてゐる。

読人不知

芹せりつ摘つみしむかしの人ひともわかことや

心こころにもものゝかなはさるらむ

(解)俊頼朝臣としよりあそんが無名抄むめいせうと云いふ書しよに「献芹せりをたてまつるといふことがある」

が、それは此の歌に叶つたことではなく、昔の物語にあることを知つて作つたものと見ゆるのである。それで九重の宮殿守司であらう、庭掃除をする者があつた、庭掃除をするさい、風が御簾を吹き立て、後の芹を召しあがつてをらるゝを見て、今一度見奉りたいと思つたけれども、見奉ることができなかつた。それで芹を摘んでは御簾の下、風の吹き入るゝ處に置いたけれども、終に見奉ることができなかつた。年月を経て病氣となつた、死ぬるとき我をいと思ふならば芹を摘んで功德にしてくださいと死んで終つた。その後遺言の通りに、芹を佛に献げ、僧にもあげるやうになつた。それ

を嗟峨の后が聞き召して哀れと思召し、芹を採つて召し食られたのであるから、それで此の歌の「心にもものゝかなはさるらむ」と歌ふたのである。

読 人 不 知

いかにせむみかきか原に摘む芹の

ねにのみなけとしる人のなき

俊 頼

はなれける手束の弓の白鳥を

紀の川ゆすり戀ぬ日はなし

(解)無名抄と云ふ本に、昔男があつて、女を深く愛した。あ

る夜の夢に、此の女は、私は遠に行く故に紀念にこれを置くから、私の換りに大切にしなさいと、いはれて、夢は醒めた。驚いて枕許を見るに、女はゐなくつて弓が立つてあつた、餘り不思議に思つたが、然しどうすることもできない、それで弓を片側に立てかけて置いた、明暮れ手に取り弓引きなごして身を離さなかつた。暫時たつと此の弓は白い鳥となつて南の方に飛んで行つた、後を慕つて行つて見れば、人になつて、左の歌を詠んだ、

朝もよひきの川ゆすり行水の

出さやむさやいるさやむさや

(解)と、かの弓は紀の關守が弓であつたといつてゐる。舊い歌に紀の關守が手つか弓と詠んでゐるし、又曾根義忠の歌に、まつらなるおふちの眞弓みる時そ

いもか手風はいと戀ひしき

讀人 不知

しやうふ草もの思ふゆるに山の井の

あやめになりて佗しかりけり

(解)顯照法師が色葉抄に書いてあるに、昔さうもくと云ふ、貴い人に思ひをかけてあつた。自分は賤しい男であれば叶はないで年月を経たが、菖蒲の冠を被て、貴い人をまねた、それ

から菖蒲を、あやめといふやうになつたといつてゐる。

春

左馬頭藤原親定

雁かへる常世の花のいかなれや

月はいつくもおなし春の夜

(解)此の歌は春の姿を歌つたので、大に餘情あつて雅なる物である。それで月は宮古、花は越路といふことを把つて讀んだので常世の花は如何だから雁はかへるであるぞといふのである。爾して又外の意味は月は三千世界をも同じやうに照らしてゐて。此の世界の花だけでは満足ではない。と要するに、やうに知らない人へも豊かに思召すことは、天子様である。

夏

夏の夜夢路す、しき秋の風

さむる枕にかほるたち花

(解)此れは夏の夜の涼しいことは、秋風の心持がする。それに枕に香ばしい橘の香で、さては秋ぢやないかと、思つたのは夢であつたと讀んだのである。

秋

しほれしし袂はすまも長月の

有明の月に秋風を吹く

(解)この歌は、立秋の頃より、悲しさに涙に濕り、萎れてゐた

袖の、干す隙もないのに、剩へ長月の月も有明となつて、それにかへて秋風さへ吹いてきて、いと悲しい、淋しい涙を袖の上に浮べては打ち沈まざるをえないのであると讀んだのである。

冬

思ひつゝあけ行く夜半の冬の月

やとるかさはき袖の氷に

(解)是は自分の袖の氷より外には、宿る所もない。「あけ行く」つまり自分の袖のせまい、明るくなるには時間がない。どうして自分のやうな賤しい者に月の如き、聖き心を宿すること

ができやうぞ、できない。と謙遜の歌である。

戀

いかにせんなをこりすまの浦風に

くゆる煙のむすほはれつゝ

(解)此の歌は、辛い憂い試にも懲りないで、尙思ひの煙は引きも切らず、結びついて行くのを、怎うしやうとの心である。

旅

旅衣きつゝなれぬる月やあらぬ

春や都と霞む夜の空

(解)此の歌は、春であれば、都の月も霞むのであらう、旅の空

にで、みれば、なんだかそつけない月のやうに見えて、心
悲しいのである。

左大臣良經

春かすみあつまよりこそ立なけれ

あさまのたけは雪けなからに

(解)此の歌は、淺間嶽は雪があつて物皆冷いのだが、先づ東か
ら春の景色が、進みくるといつたのである。北國の淺間嶽は
まだ雪がふつてゐるのに。詩に説いてはいはく、誰言春色自東
到露暖、南枝花始開と、此の詩の心をかりて、春霞東より
こそと詠んだのであらう。

こそと詠んだのであらう。

松立るよさの湊の夕涼み

いまもふかなん沖津鹽風

(解)此の歌の與謝の湊は、納涼に極く好い所と見える、されば
涼しさと景色の好いことは、いふばかりないけれども、猶し
ても沖つ風よ、鹽風よ、吹けと詠んだのであつて、今ものも
は今吹けといふのと同じである。

萩原や夜半に秋風露ふけは

あらぬ玉散る床の左薙

(解)此の歌の、あらぬ玉ちるとは、思ひがけない露の玉の散る

のは秋風の故ぢやこれを聞くと、常よりも悲しい涙がこぼる
 といつたのである。

山里は横のはしのき霰ふり

せきいれし水の音信もせぬ

(解)此の歌の心、實に哀れな淋しい歌である。堰を構て小溝な
 んかに通はせる水も、落葉などに埋められて、その音信、即
 ち音もない、然るに情けのない横の葉にのみ霰が散つてその
 音の淋しいことは、何んともいひやうがないとの心であつて
 「山里は冬ぞ淋しさまさりけり、人めも草もかれぬと思へは」
 の歌の心と同じである。

忘れなん中々またし待とても

出にし跡は庭の蓬生

(解)一度訪問した人は、又も尋ねて来しことなくて、その忘れ
 がたみには、庭の蓬ばかりで、中々またるゝものであらうが
 まつても効ひないことであるといつたのである。

夢にたに逢ふ夜まれなる都人

ねられぬ月に遠さかりゆく

(解)離れた都は、夢でさへも疎いのに、旅寝の憂に、寢室にあ
 りながら、月に物思ふ身は、ありし場所より遠くなつて行く
 あゝ心細いものであるとの心である。つまり夢にも都の人を

見ることができぬ、まして旅ねの空に月でも見たならば、哀れが深刻に身に沁むのであるといふのである。

前大曾正慈圓

吉野川花の音してなかるめり

霞の内の風もとゝろに

(解)此の歌は餘情のある歌である。河上の花は散つて流れてくれば、水の音ではない花の響きのやうに聞ゆると詠んだのである。だから霞の奥の風もとゝろに聞ゆめりといつたのである。吉野の花如何に、面白く歌ひ出したのであらう。

まこも苅るみつのみまきの夕間くれ

ねぬに目覺す時鳥かな

(解)此の歌は、まこも苅るといつたならば人は知つてゐるでせう、されば時鳥聞ばやと思ふ心はなくつても、歌の心相通するに、さても目を覺すといつたのは、誠に神變鬼没の歌である。それで邊りには山などは無い、まこも高く積んであるものと見える、そこに夕べに聞ゆる郭公の聲、その一聲を聞いて目を覺した、有情無情、この感に迫るのであつた。

秋ふかきあはちの島の有明に

かたふく月を送る浦風

(解)淡路島に、月は落ちかゝつて浦風は吹き送つてくる。なん

といふ景色でせう、ひろくした海原に、ゆるやかな浪の間に、月落ち、あけの風、白帆も夢のやうに見えて、神ならぬ心でも、自然に近づいたやうな心地がするとの意である。
ふる雪に磯の松風むすほほれ

しまめぐりする浪聞ゆなり

(解)磯の松風が、雪の中に立つてゐる、ためたやうな松に、か
らみついて何んか呷やきあふやうな風情である。それに浪の
音は、波のまゝに岩を洗つてゐる。その音、高く、低く、波
は又大山、小山と綾を織つてくるのである。爾しては鳥を廻
りするのであるとの意である。

人しれぬ泪はかりにぬれぎぬを

夢にほすやと返へしてそぬる

(解)此れは小町が「いとせめて戀しきときは、ぬは玉の」の心
を取つて詠んだのであらう。ぬれぎぬとは、戀しいが逢ふこ
とができない故、ぬれぎぬといふたので、夢でさへ逢はれぬ
時の涙で濡れるといつたそのぬれぎぬである。その濡れた衣
を何うしてほすべきであらう、おゝ我が見る夢でなくては、
誰れにも頼む者はない、それだから夢もほすやと返してぞぬ
るとの意である。哀れ此の歌は片思の戀であると思ふのであ
る。

袖のつゆ恨しきまで旅衣

草しく床に秋風そ吹く

(解)旅に出て、先づ初のうちは心面白いが、だんく時たつてくれば、恨しいことが澤山湧いてくる。まあ旅は悲しきものである。だから可愛い子には旅をさせよといつたので、旅には悲しきもあれば、うれしきもあり、然し苦しいことは一通りでない。

藤原定家朝臣

花さかり霞の衣ほころひて

峰白妙の天の香久山

(解)餘りに花が咲き亂れて、霞の衣がほころびるやうだ、爾して峰は眞白で如何にも神々しい香久山であると、香久山を優々と詠んだのである。

五月雨の布留の神杉過かてに

木たかく名乗る時鳥哉

(解)雨はどしどし降つて、布留の神杉から飛んで外に行くことができないで、木の上高く八千八聲、泣きついでてゐる。爾して社の四邊の淋しい様や、神々しい様なことも、うたひ込まれてあることが目に見るやうである。

霜よふ小田の苜蓿のさ蒔に

月ともわかすいねかての空

(解)小田の蒨穂が、秋ふかき霜夜の月のさ庭に寫つて、霜かと思つて、寒いくで伏しねするさまを歌つたのである。
濱千鳥つまとふ月の聲寒し

蘆の枯れ葉の雪の下風

(解)さえ氷つた寒い晩に、濱千鳥のさぶ音が、如何にも身に沁むやうである。爾して枯葉に月が照つて、白く、丁度芦の枯葉に雪でもふりかゝつてゐるやうであるとの意である。

たのむ夜の木の間の月もうつろひぬ

心の秋の色を恨みて

(解)待つてく待ちくたびれて辛い夜、月も無情な人の心を恨んで、更行くかと思ふのであると、詠んだのである。
秋の色とは、人は自分を訪問してくれないから、まあ我を飽たのだらうといふのである。
袖にふけさそな旅ねのゆめもみし

おもふかたよりかよふうらかせ

(解)迎ても旅ねの夢は安らかに結ばれない、たゞ都の方ばかり思はれて致方がない、その戀しい方から吹いてくる風ならばせめて袖へでも宿らして、都の人を偲びたいなといったのである。とにかく、此の歌は、源氏物語の

「戀侘ひてなくねにまかふ浦浪は

おもふかたより風や吹らん」

を取つたのであらう、旅ねの夢には、風をつらく感ずるのに思ふ方より吹いてくるならば、いくらでも吹けといつたのである。あゝ最も哀れに悲しい意に歌はれた歌である。

上總介家隆

櫻花散りかひかすむ久方の

雲井にかほる春のやま風

(解)此の歌の意は、櫻花が散つて、(かひて)交換するやうに舞ひ飛んで、久方の空も花瓣で閉がつてゐる、即ち霞んで、

春の日がぼんやりしてゐるやうである、春の山風といったのを見れば、山櫻が谷間の風、峯の嵐に散らされるやうな感じがする。とにかく景色を歌つたので、その佳なること見るべしである。

鳥羽玉の夜は明ぬらし足曳の

山郭公一聲の空

(解)山時鳥はたつた一聲鳴いたばかりで、夜は明けたらしい、なんと夜は短かいものだといふことである、足曳とは山といふことに對しての枕詞である。とにかく此の歌は、

「夏の夜はふすかとすれば時鳥

啼くひとこゑに明るしのゝめ」

といふ歌を採つたので、なくひとこゑに明るといへば、郭公の一聲鳴けば、さても夜も明ぬらしいと詠んだのである。

虫の音もなみた露けき夕暮に

とふ人としては萩の上風

(解)是は虫の聲も、涙ながらであつて、訪れてくれる物は、萩の上風ばかりで、秋の心、いと腸を千切るやうであるといつたので、虫の聲は涙、とふ人は萩の上風、寂たる晩景はえもいはれないこのことである。

詠つ、幾度袖にくもるらん

時雨に更る有明の月

(解)有明の月の傾ぶく迄、晴れたり、曇つたり、幾度であつたらう、歌を詠む間にも、晴れ、曇りは、袖に幾度移つたのであつたらう、あゝ長々し夜の恨に、どんなに心むせかへつたのであらう。曉方になつても月は晴れたり曇つたりするやうに、自分の心は、涙で、袖の上に涙のしづく絶えまないのである。哀れな者の身であると歌つたのである。

みすもあらぬ名残りはかりの夕暮を

ことありかほに何またるらん

(解)此の歌は、

「見すもあらず見もせぬ人の戀しくは

あやなく今日や眺めくらさん」

といふ歌を把つたので、自分はまだ見もしない人を思つて、戀に落ちた、爾してその人の面影の名残り、又夕暮の名残りを、いと惜しく、なんか意味ありさうに、何を待つともなく目的のない物を待たるゝのであると、嘆いた歌である。尙みすもあらぬには今一つの意がある、一寸と見たばかりで、言葉もかはさない、たい知つてるといふやうな人を戀ひして云々といふやうな意味もあるのである。

旅ねする夢路はゆるせ宇津の山

關とはきかす守人もなし
 (解)此の宇津の山をば、うつゝの山と心得てよい。それで夢の通路をゆるせ、尤も關のあるとは知らないで、此れ迄になつたのである故、君よゆるしてくれよ、といふのである。然し目的の逢ふべき人はない、つまり守人はない。既に自分を忘れた人ばかりであると、哀れみを求むるやうな歌である。

寂蓮 法師

かつらきやたかまのさくら咲きにけり

龍田の奥にかゝる白雲

(解)葛城高間の櫻が今を盛りに咲き亂れて、峯に横たはる白雲

のやうに聞えんと、詠んだ歌である。下の句の立田の奥は、立田山といふべき所を力を入れて龍田の奥といつたのである。かつらきやたかまのは、葛城山・高間山をいつたので兩山の花盛りを詠つて、巨細なく兩山之美を世人に紹介したのである。夏の夜の有明の空の時鳥

月よりおつる夜半のひとこゝろ

(解)雲間の月細々と現はれた、そこに時鳥の一聲、啼いたその一聲は何んたる意味がこもつてゐるであらう、と詠んだのである。爾して今一聲聞きたいと云ふ意も含んでゐる。「月か鳴いたか時鳥」の歌も思ひ出されて面白い背景を想起するの

である。

軒近き松をはらふか秋の風

月はしくれの空もかはらて

(解)月を時々閉ざす時雨を、風は拂はないで、軒の松をのみ拂つて悲しい感じがするよと、秋風を恨んだ心である。

山人の道のたよりもをのつから

思ひたえねと雪はふりつゝ

(解)冬ごもりをしてゐる、淋しい山家などでは、雪ばかり降つて、山には人の道も絶え、物すさみの道もたえて、身に沁みこむやうな寂しい感じをどうしやうといふのである。つまり

人めも草も枯れぬと思へばの感じである。要するに此の歌の意は、此の世を厭ひて山に隱遁したが、樵夫や、山賤人は尋ねてこないであらうか、と心残りするに、雪ばかりは降つて、別に好きな人もこないと云ふ心である。

憂なからかくてやつゐにみをつくし

わたらてぬるゝえにこそ有けれ

(解) 憂いながらも逢ふことができたならば、幾分の心休めあるであらうが、生憎の縁、まだ絶えぬ縁ながら、實に恨めしいと、みをつくさばやと思ふばかりであるとの意である。

「みをつくす」といふことは、水滓しので、身を沈めても

といふことであるし、「憂」は浮きに通はせて詠んだ歌である。「わたらでぬるゝ」は徒にあるえにしであるといふことである。

武藏野の露を袖に分け侘ひぬ

草の茂みに秋風を吹く

(解) 行ななき武藏野の、露の儂なきを、分侘びて袖にのみかけたので、草の茂みには、秋風ばかり吹いて、いと都の事を思ふ涙に、おやめもなく濡れまるといふことを歌つたのであつて、つまり秋風が吹いて、草葉の露は落ちて、袖の上の露のみしげしいとふことである。

雲さそふ天つ春風かほるなり

たかまの山の花さかりかも

(解)是は天津春風の花の香に、薫じて雲を誘ひ行くやうな、そ
んなに花盛りかもと詠めるは餘情ある歌である。爾して高間
の山の花をいかにも優美に歌つたのであることは、上の句に
て知れるのである。かもは感動詞であつて、用言にも續くも
のである。

みなれし卯花月夜時すきて

かさねにうとさ山時鳥

(解)卯の花は垣根に咲いて、山郭公の聲もなれくして、聞える

宵のまの月のかつらのうす紅葉

照としもなき初秋の空

(解)まだ宵のうちには月の桂も薄い、初秋なれば紅葉もまだ色
い、だから照年もないと詠つたのである。然も見る夜の景色、
秋の夕をも思ひ出されて、いともゆかしき歌である。

淋しさはなほ残りけり跡たゆる

落葉か上に今朝の初雪

(解)秋程悲しい、淋しい物はないけれども、尙も盡すして、冬

の山家まで追及ひぼして、淋しくあり、悲しくありといったのである。爾してはほろ／＼と散る木の葉の上には、今朝は又初雪が降つて、淋しさ甚だしいのであるといったのである。跡たゆるとは、日頃きてゐた人もこの寒さ、この雪で見えないなどの意である。

忍はすよしほりかねつとかたれ人

物おもふ袖の朽ちはてぬまに

(解)物思ひが極まつて、袖も涙に朽れて失せてしまふに、せめて皆朽ちない内に、凋萎かけたといふことを、自分の思つた人の許へ告げてくれろと、いふことばである。要するに此の

歌は自分の身が亡せてしまはないうちに、人は語り傳へよといったので、最も忍ぶべきを、思ひの切なる餘りに忍ばずよといったのである。哀れに、負けをしみと云ふ、哀れな歌である。

旅衣たつ 曉の別れより

しほれしはてや宮城野の露

(解)是は都を立つた時、曉に流した涙は、露は消えもしたが、しほれし果てや、陸奥の宮城野にいつても、涙の露は乾かない、丁度其の時、自分の着いた宮城野の露も消えずしてあつた、つまりこれは自分の憫れを泣いた涙の露であるといった

のである。此の歌の意を一言につくせば、都から旅ねを重ねて遠い陸奥まできても、悲しみは失せないの、悲しみの旅でありとの意である。

平 忠 度

さゝなみや志賀の都のあれにしも

むかしなからの山櫻かな

(解) 近江の志賀の都は荒れ果て、見る影もないが、昔見た時と同じである、山櫻かな、平忠度は、京都にゐて美々しき生活をしてゐた、然るに榮華の花は散つて、落人となつた、然し山櫻の貴方は昔に變ることなく、立派な邸宅にをらるゝの

である。此の歌を扉の内へ投げ入れて西國落をしたのである。

讀人 不 知

なれて吹くなこりやをしき青柳の

たをりも枝をしたふ春風

(解) 枝垂れ柳を、慣れて吹いてゐた風は、別れともなくて、そのたをつた枝を慕ひしたつて、柳の折れ枝の行く所までも、ついていつて、執拗にも吹いてゐるとの意で、主と臣との情を歌つたのである。

みちか夜の深行くまゝに高砂の

嶺の松風ふくかどそきく

〔解〕高砂の嶺とは高い山といふことである、爾して松風云々は百詠風詩に松聲入ニ夜琴とある。それで此の歌の意味は、春の短い夜に思ひにふけつてゐるうち、更け行つて、何々の音もないし待つ人もこない、たゞ高い山の松風の音ばかり聞えて、待つ人かと思へば、さうではなかつたこのことである
みる人もなくて散りぬるおく山の

紅葉はよるのにしきなりけり

〔解〕漢書に朱買臣を會稽の太守としてつかはす時、武帝のいふに「富貴不レ歸ニ故郷、如ニ衣レ綉夜行、今子如何、買臣頓首謝」

と云々、朱買臣はもと呉の人である、家は貧乏で、薪を賣つては生活をしてゐたが、武帝にめされて會稽の太守となつた人である。それで紅葉はよるの錦なりけりである。から、運は天にありと云ふ教訓である。

(二一〇)由緒のある歌

野中の清水

読人不 知

いにしへの野中の清水ぬるけれど

もこの心を知る人そくむ

〔解〕野中の清水は、播磨國いなみ野にあつて、昔は芽出度き水であつたが、末世になつてぬるくなつたけれども、故の事を

知つてた人は、この野中の清水を尋ねて、汲むのであるこのことである。

四の船

聖武天皇

四の船はやかへりことしらかつき

わか物裾にして、またなむ

(解)入唐大使藤原の清河に賜へる長歌の友歌である。それで遣唐使には、大使、副使、判官、主典の四人の使あるによつて四網舟を備へられたのである。それからできた詞で、その時の長歌にも四の舟といふことかある。

篠田杜の千枝

和泉なる篠田の杜のくすの木

千枝にわかれて物をこそ思へ

(解)篠田の杜には、楠木の一本が殖え擴かつてゐて、枝が澤山あり、即ち千枝に別れてあつたといふことである。それから篠田の杜の千枝と讀むやうになつたのである。

小花かもとの思草

讀人不知

道の邊の小花かもとの思草

今さらになそ物を思はん

秋の野のを花にましりさく花の

色にやこひんあふよしをなみ

(右)古の兩歌の思草は、草の名でない、たゞ草をつけたばかりである。爾して後の歌の由緒の花に交りといへるは、龍膽の花の霜かれに残つてをいふのである。

餘五湖織女の水あめ

曾禰好忠

よこの海にきつゝなれけん乙女子か

天津羽衣はしつらんやは

(解)曾丹か三百六十首の中、七月上旬の歌である。餘五の湖に織女の下つて水を浴るとて衣を松にかけしことあるといふより始まつたのである。

常陸帯

讀人不知

あつまちの道のはてなるひたち帯の

かことはかりもあはんどそ思ふ

(解)常陸國鹿島明神と申す神の祭の日、男を懸想する女は、人の數多ある時に、布の帯にその名を書き集めて、神の前に置くのである。澤山あるうちに、好た男の名を書いた帯は、自ら裏かへるので、それを把りて抜いたのを女は見、さも女の思ふ男の名ある帯であるから、やがて御前でそれを聞えて男女したしくなるといふことである。

玉箒

大伴家持

はつ春のはつねのけふの玉はつき

手にとるからにゆらく玉のを

(解)右の歌は、天平、寶字二年正月三日、侍從等を召して、内裏の吾妻舎に侍らしめた、爾して玉箒を賜はつた時に、内相藤原朝臣鎌子、勅を奉りて、公卿等に歌を詠せ、詩を賦せしめた時、右中辨大伴宿禰家持がよめる歌である。これより玉箒の詞はじまつたのである。

筑摩の祭の鍋

讀人不知

いつしかもつくまのまつりはやせなん

難面人の鍋の数みん

(解)近江の筑摩の大明神の祭典には、女の男したるかす鍋を戴

いて渡るといつている、耻かしい祭である。

和琴おとめと化して夢に見ゆる 娘 子

いかにあらん日の時にかもこるしらん

人のひさのへわか枕せん

同 大伴 卿

こととはぬ木にはありともうるはしき

君かてなれのことにもあるへし

(解)對馬國結石山の桐のまご枝で造つた大和琴があつた。此の琴太宰帥大伴卿の夢に娘子に化けて歌を歌んだ、そこで大伴卿は返歌をした、二首ともに前に掲げた通りである。乃ち天

平九年十月七日、此の琴を中衛大將藤原房前卿に奉るべし
と、二首の歌の始末を状にかいて奉つた、藤原卿は乃ち答歌
をしたのである。

事とはぬ木にもなりともわかせるこの

たなれのみことつちにをかめや

とふさたて舟木さる

沙彌 満誓

とふさたてあしから山に舟木さり

きにきりよせつあたらふな木を

(解)此の歌は、満誓が筑紫の觀世音寺を造る時の歌である、爾
してとふさは、鳥總と書いて、木の末である。山に入つて木

を伐つては、必ず、その木の末を伐つて、伐つた木の跡にた
てるといふのである。

三輪檜原挿頭折

讀人不知

いにしへに有けん人も我ことく

三わのひはらにかさし折りけん

(解)萬葉集にもある通り、花紅葉でなくたつて、いづれの草木
でも、かざしに折るべきものないことない、何にも不審では
ないとのことである。

河原左大臣鹽竈の浦

貫 之

君まさて煙たえにししほかまの

浦さひしくもみえわたるかな

(解)河原左大臣源融公六條河原にいみじき家造つて、池を掘り、水を湛へて、毎月潮卅石ばかり運び入れて、海の魚介を飼ひ、奥州、即ち宮城縣の鹽竈の浦に擬して、海士の鹽焚く家を造り、煙をたて、弄んだのであつたが、左大臣の逝かれた跡は煙が立たずなつたのである。それを貫之は見て詠んだので哀れな歌である。

姨すて山

讀人 不知

わか心なくさめかねつさらしなや

をはすてやまにすむ月を見て

(解)大和物語にある。信濃の國更科にあつた男のことより、姨すて山どなつたのである。

ぬれきぬ

讀人 不知

かきくらしことはふらなん春雨に

ぬれきぬきせて君をとめん

(解)古今集に離別歌とある。ぬれきぬとはなき名のことをいふのである、その來歴は確かではないが、春雨にぬれきぬきせての歌は、ある説によれば、人の旅に出やうといつたが、生憎の雨で出なかつた、然し雨が止んだならば出やうと思つてゐたが、それき空ごととなつてしまつたのである。つまりぬ

れきぬは、このことより始まつたものと見えるのである。

貫之

「春くれはさくてふことをぬれ衣に

きするはかりの花にそ有ける

(解)此の歌は、咲くといひたれど、程もなく、散つて了へば咲いたといふ名ばかりで、夢のやうだと、即ちぬれきぬをきるわけである。

(三二)古今の和歌百種

定家

伊駒山嵐も秋の色にふく

手そめの糸のよるそかなしき

後京極

我泪もとめて袖にやとれ月

さりとして人のかけはみえねと

長明

秋風のいたりいたらぬ袖はあらし

たゝ我からの露の夕くれ

家隆

此のほとは知るもしらぬも玉銚の

行きかふ袖は花の香そする

みるめこそ入ぬる磯の草ならめ

袖さへ波の下にくちぬる

讚 岐

佗ぬれは身のうき草のねもたえて

小 町

さそう水あらはいなんぞそ思ふ

俊 成 女

折ふしもうつれはかはる世の中の

人の心の花のめのそて

忠 岑

春たつといふはかりにやみよし野の

山もかすみてけさはみゆらん

慈 圓

有明の月のゆくゑを詠めてそ

野寺の鐘はさくへかりける

徳川 光圀

今はたゞ書よりほかの友も見す

昔をかたる人しなけれは

下河邊 長流

富士の根に登りて見れば天地は